図書館だより　第２１号

八千代市立大和田図書館　482－3240
八千代台図書館　482－0912
勝田台図書館　484－4946
緑が丘図書館　489－4946
ホームページ　http://www.library.yachiyo.chiba.jp

八千代市図書館整備構想・八千代市図書館整備計画を策定しました。

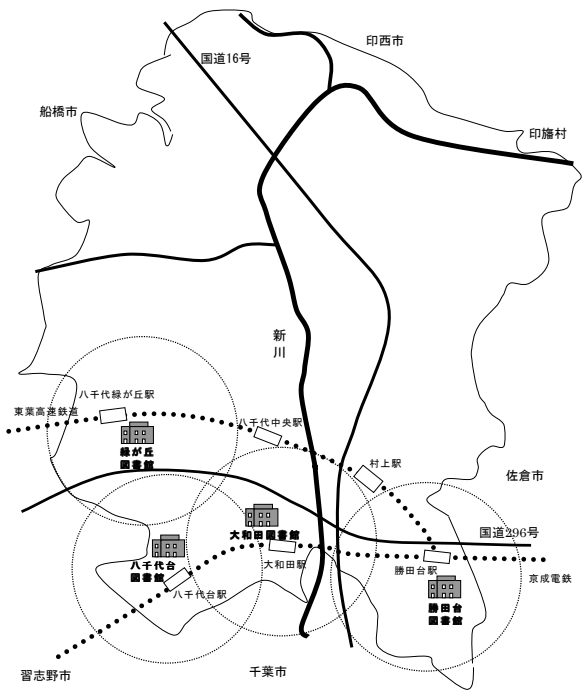
“八千代市第３次基本構想”では、まちづくりの基本理念として、「一人ひとりの市民が尊重されるまちづくり」「生活者の視線で見たまちづくり」「パートーナーシップによる自立できるまちづくり」を柱に掲げています。「**八千代市図書館整備構想**」は、これらの理念を踏まえて、東葉高速鉄道の開通による新たなまちづくりの展開という本市の特性と、学習要求の多様化、高度化、専門化などに応えるため、学習の機会を提供する施設としての図書館の整備について、基本的な方向を明らかにすることを目的として策定しました。

本市の図書館の現状と課題、新たな図書館づくり・社会状況の変化への対応・中央図書館の必要性を構想として掲げています。構想の期間は平成１８年度から２２年度までの５年間ですが、必要に応じ見直しを図ります。

「**八千代市図書館整備計画**」は、「八千代市図書館整備構想」を基に策定しました。

第１章・八千代市の概況と将来像、第２章・図書館サービスの現状の分析、第３章・図書館サービス網計画、第４章・これからの図書館に求められるサービス、第５章・中央図書館の役割と機能、第６章・中央図書館整備計画について、となっています。

市内各図書館でご覧いただけます。

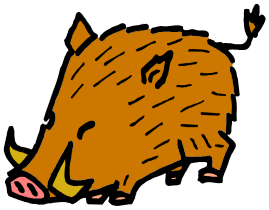


現在の図書館配置図

２００７年は十二支最後の「亥」年です。

亥＝**猪**　縄文時代～現代までもっとも一般的な山野の大型哺乳類であるとともに、鹿と並んで農作物を食害する最大の害獣でもある。体が太く、首が短く、口が突き出しているのが特徴で、ヨーロッパ中南部からアジア東部に生息しています。背面に黒褐色の剛毛があり、子どもは「うり坊」と呼ばれ親しまれています。オスの下あごには牙があります。泥浴をこのみ、体を木にこすりつけてダニを落とし、根や地下茎を鼻で掘り起こして食べます。その性質はよく鼻がきき、神経質といわれています。

◆猪のトリビア



◎名前の由来は、「シシ」とは「肉」、「イノ」は「イノ一番」の「イノ」で、イノシシの肉は一番おいしいところからついたという説と、十二支の「亥」（い）の肉（シシ）だからイノシシになったとの説があります。

◎明治３２年、日本銀行券の最も高額な十円札の裏面に猪の図が登場。この十円札は、大正６年まで存在しイノシシとの愛称で呼ばれました。猪が用いられたのは、十円札の表の顔の和気清麻呂を守護し、さらに発行年の干支が亥年だったからとのことです。

◆猪のことわざ

◎猪の手負い　　イノシシが手負いになると、気が立って危険である。きわめて危険であることのたとえ。

◎猪は射手の前、焼酎は上戸の前　　「射手」は弓を射る人。「上戸」は酒飲みのこと。物にはそれぞれ置くにふさわしい場所がある。

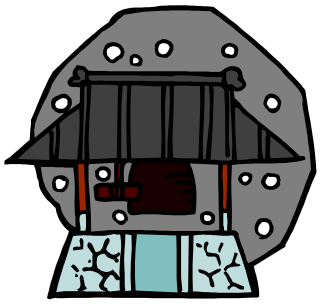
◎猪も七代目には豕（いのこ）になる　　何事も長い年月の間には変化するという意豕は猪の古称で豚ともいう。

◎片側破りの猪武者　　ひたすらに一方にだけ突進する人。また、進むことを知って退くことを知らない人。

◆亥の子もち

中国から伝わった風習で、旧暦１０月の亥の月、亥の日、亥の刻（午後９～１１時）に猪の形をしたお餅を食べ、多産で丈夫な猪にあやかり、無病息災・子孫繁栄を祝いました。『源氏物語』の「葵」の巻にも登場しています。

もうすぐお正月です



除夜の鐘の１０８は人の煩悩の数といわれますが？
煩悩とは仏教用語の一つで、わずらい悩む「迷いの心」を指しています。迷う原因は、目、耳、鼻、舌、身、意の六根です。また、別に煩悩には、好（好き）・悪（嫌い）・平（どちらでもない）の三種と、苦（苦しい）・楽（楽しい）・捨（どちらでもない）の三受があります。この三種三受が六根それぞれにあって、この三十六の煩悩が、過去・現在・来世という三世に生じるという考えから、６（根）×（３（種）＋３（受））×３（世）＝１０８　となるのです。除夜の鐘の音には、煩悩を取り除き、清らかな気持ちで新年を迎えましょうとの願いが込められています。

初詣に**七福神めぐり**はいかがでしょうか？
七福神とは、恵比寿・大黒天・毘沙門天・弁財天・布袋・寿老人福禄寿の七人の神ですが、この神様方の出身地はご存知ですか？恵比寿が日本（神道）、大黒天・毘沙門天がインド（仏教）、弁財天がインド（ヒンドゥー教）、布袋・寿老人・福禄寿が中国（道教）となんとも国際色豊かです。元旦から七草までの間にまわるのがよいとされています。八千代では、吉祥天を加え「八千代八福神」としています。お隣の佐倉・習志野・印西にもあります。

七草粥を食べましょう！
七草粥の風習は中国から伝わり、平安中期に始まったとされています。１月７日朝、無病息災を祈って春の七草（せり・なずな・ごぎょう・はこべら・ほとけのざ・すずな・すずしろ）をいれたお粥を炊いて食べます。おせち料理で疲れた胃を休めビタミンを補うという効能もあります。

日常のいろいろな場面で疑問が生じた時、また、ちょっとした暇つぶしとして、「**雑学**」の本はいかがですか。仕事・冠婚葬祭・慣習など、「今さら人に聞くのはちょっと」というときにも役に立ちます。「こんなこと知ってる？」と誰かに話すだけでも、博学になった気分を味わえます。各種「雑学」の本が図書館に揃っています。

≪リサイクルブックフェアを開催しました。≫

１０月２８日（土）午前９時３０分から、教育委員会１階の会議室で開催し、５００名ほどの方々が集まり、盛況のうちに終えることができました。

”新書”がおもしろい！

“新書”ブームが止まりません。ベストセラーが次々生まれています。なぜ、今、ここまで“新書”が支持されるのでしょう。以前は“新書”といえば、岩波・中公・講談社現代という御三家を中心とした格調高くアカデミックな図書として位置づけられ、読者層も限られていました。

ところが、平成１０年の“文春新書”の創刊が流れを変え、軽く読める教養新書の創刊が相次ぎました。そして、一大ブームの火付け役となったのが、平成１５年創刊の“新潮新書”の「バカの壁」です。現在、新潮社・光文社・筑摩書房が“新書”の新御三家と呼ばれています。教養系の“新書”だけでも３０のシリーズがあります。

今までの“新書”と比べ、活字が大きく、簡単に読める点が忙しい現代人に受けているのでしょう、読者層も年代・男女を問わず拡がっています。「人は見た目が９割」「下流社会」と言った、ストレートなものやひねりの効いたタイトルが多い点にも引き付けられているようです。あらゆる分野に広がっている“新書”の波にあなたはどこから乗りましょうか？

＊ 百万部以上売り上げている“新書”

「バカの壁」　養老孟司　新潮社

「国家の品格」　藤原正彦　新潮社

「さおだけ屋はなぜ潰れないのか」　山田真哉　光文社

＊ 最近のベストセラー

「世界の日本人ジョーク集」　早坂隆　中央公論社

「若者はなぜ３年で辞めるのか？」　城繁幸　光文社

「般若心経　現代語訳」　玄侑宗久　筑摩書房

★★★あんな話題こんな話題★★★

「ナマハゲ伝導士」「東京シティガイド」「明石・タコ」「博多っ子」さて、これらの共通点は何でしょう？　それは、すべて実際に行なわれているご当地検定の名称なのです。

「英語」「漢字」だけでなく、「マナー」「時刻表」「常識力」などさまざまな検定試験が行なわれています。特に最近人気なのが、前述のご当地検定です。もっと地元のことが知りたい、もっと地元をアピールしたいという受験者側と主催者側の気持ちが重なり、またたくまに全国津々浦々に拡がりました。

千葉県でも、２００６年に第１回目の「房総（千葉）学検定」を実施しました。第２回目は、２００７年１１月頃に予定されています。

図書館だより　第２１号

＊編集　八千代台図書館

八千代市八千代台北６－７－６

TEL047-482-0912

＊発行日　平成１８年１２月